

今月の一言

キーワード：公正無私

企業は同じことばかりを行っていると必ず衰退するときが来る。時代遅れにならないよう、刻々と変化していくことが大事。継続的に繁栄してきた企業は一見変わっていないようにみえても、中身を見ると必ずとっていいほどしなやかに生きている。それは簡単なことではありません。企業経営者が自分の保身や名声を第一に考えてしまい、企業にとってではなく、自分にとって都合のいい策を打ってしまうというケースが実に多いんですね。そこで生きるのが、自分と企業は一心同体だという家業意識。企業と自分の利害が一致すれば、保身など気にせず、進むべき道をニュートラルな目で見ることが出来る。そういう家業意識を持つためには、企業が築いてきた歴史や伝統に心から敬意を払う空気を維持するか、さもなければ創業家一族が経営を行うかです。もちろんすべての判断が正しいということはありませんが、公正無私であることは、物事をみる目を曇らせない。それが生きる道の見極めに重要なんです。

生きる道を見極めるとき、人間はあるべき方向ではなく、自分の得意とするものに頼りたくなるものだ。自動車産業にかぎらず、日本の製造業は伝統的に技術開発、それも先端分野を得意としてきた。その得意分野にしがみつき、自分が勝っている分野がいちばん発展するはずという都合のいいシナリオをつくって行動し、その結果、戦略の破綻を招いた例がどれほど多かったことか。デジタル家電、太陽光発電や原子力発電などのエネルギー、ITなど枚挙にいとまがない。

自動車も同じである。日本の自動車産業は、少なくとも技術発展に関しては世界に冠たる実力を持っているが、市場戦略面では価格帯の高いクラスになるほど存在感を示せなくなるという状況は、この30年のあいだほとんど変わっていないというのが実情だ。

著書：レクサス トヨタは世界的ブランドを打ち出せるのか 著者：井元康一郎

三方よし！ Win-Win

2016年5月25日

さいのう とおる

追伸：新緑の季節です。仕事でも多くの芽が出るように種まきをしましょう！